

『直虎のふるさとを訪ねて』で言い忘れたこと

二七回生 林 裕 三

昨年発行した本誌20号で「関西からの報告」の『直虎のふるさとを訪ねて』において書き忘れたことがあるので追加したい。20号と重複する部分もあるが、お許しを。まず20号を読んでから本稿を読んで下さい。また、テーマごとにまとめてあるので時代が前後しているのはご容赦頂きたい。

一．一族の政略結婚と今川の監視体制

天文8年(1539)その時の井伊家の20代当主直平の娘佐名(以下、名前は~~三~~大河ドラマに準ずる)を今川義元に人質として差し出したことで、井伊家は今川と和睦し、今川家の配下になった。また、今川家の家臣・新野左馬助親矩(以降、左馬助)が目付けとして井伊谷に移り住み、妹千賀(後の祐椿尼)が直平の孫の22

文11年(1542)21代井伊家当主直宗(大河ドラマでは出ていない・直虎の祖父)田原城攻めの先頭に立たされ、軍利なく討死する。このように今川は井伊に軍役を命じる他、今川の家臣・新野、小野を井伊に派遣し目付き役とした。井伊家には古くから奥山、中野の重臣もいた。

大河ドラマでは直虎につき従っていた奥山朝利、六左衛門祖父孫関係、中野直由、直之親子を覚えておられるだろう。

もう少し家系図を参考にしてみたいながらこの姻戚関係につきあつて頂こう。ただし、奥山家などは朝利の子供か、その父親の親朝の子供かなどははっきりしないし娘が何人もおり区別が出来ないところもあるのでご容赦頂きたい。

奥山朝利の長男朝宗は桶狭間で戦死するがその息子の六左衛門(歴史的には朝忠)が新野左馬助の指示により直親の嫡男虎松を今の新城の鳳来寺に逃走させ、その後も徳川に仕えた虎松後の直政に付き従った。その六左衛門の妻は中野直之の娘である。朝利の娘は何人もいるが、井伊谷三人衆の一人鈴木重時に嫁ぎ、何番目かの娘“しの”(歴史小説ではひよが多い)が井

代当主直盛に嫁いだ。つまり直虎はこの千賀の娘であるので新野の血を受けている。左馬助は温厚な人柄でもあり井伊家の立場で考えるようになった。他に今川家から筆頭家老として派遣された小野和泉守政直(以降、政直)がいる。今川の意向を通そうとして井伊家の人に嫌われていたことを覚えておられるだろうが、小野家については色々あり過ぎるので次項にて述べる。

新野左馬助は井伊家臣奥山朝利の妹と結婚している。直虎の元許嫁。23代目直親は奥山朝利の娘“しの”と夫婦となり虎松後の24代目直政を産んでいる。その前に23代目直親の父親は20代目の直平の四男直満で、母親は井伊谷三人衆の一人である鈴木重時の姉である。井伊家とは少し話が飛ぶが、前述の直平の娘佐名は今川義元の側室つまり体の良い人質となつてその後、今川家家臣の関口親永(義広)に嫁ぎ、親永との間に出来た子瀬名が今川義元の養女となつて後の家康に嫁ぎ、筑山殿と呼ばれた。少し脱線すると、瀬名は父親関口の実家の姓である。さらに脱線すると直平↓佐名↓筑山殿↓長男徳川信康↓登久姫↓仁孝天皇↓孝明天皇↓明治天皇と今上天皇と繋がっている。

今川傘下になつた井伊家は今川義元の命により天

伊家当主直親に嫁ぎ、その妹“なつ”が小野政次の弟玄蕃(げんぱ)に嫁ぐ。玄蕃の嫡男亥之助は家康から命名された万福として万千代後の直政に仕える。もう一つ加えるならば、中野直之は直由の嫡男で直虎、直政に仕えたが、母は朝利の娘である。新野、奥山、中野は井伊家姻戚関係でも支えていた、つまり、どこの家も一族の安定のため政略結婚をしていたのである。

この他に井伊家ではないが、井伊家を監視する井伊谷三人衆と言われる近藤康用、鈴木重時、菅沼忠久がいる。重時の姉は直満に嫁ぎ後の23代目直親を産んでいる。重時の娘は三人衆の菅沼忠久に嫁いでいる。遠江では他に堀江城主大沢基胤(もとたね)、引間城主飯尾連龍(つらたつ)、佐久城主浜名頼広がいる。

二．小野政直・政次親子の策謀

先に今川家から筆頭家老として派遣された小野和泉守政直について触れたが、少し時代も遡るし、先になるかも知れないが、まず今川家と小野家による井伊家への「いじめ」の関わりを見てみよう。

何処の小野家も遣隋使の小野妹子の家系と言っているが、小野和泉守政直(道高)家の家系図もその例外

ではない。「それによると、井伊直平により政直の祖父小野妹子24世正房が井伊家の家老として迎えられ、小野村に屋敷を与えられたと言われている。小野家は今川から井伊への目付け家老として井伊を支える立場であって、井伊の実情を今川に報告する義務も負っている。和泉守政直は小野妹子から数えて26世である。現当主の直盛と叔父に当たる直義、直満と余り仲が良くなかったこともあって、今川家が井伊の安定の為を図るためか、天文13年(1544)直平の下の息子達直義、直満(直虎の元許婚の直親の父親)は小野和泉守政直の今川への密告により誅殺され、しかも跡取り亀之丞後の直親にも害が及ぶと考えた直満の家臣今村藤七郎はカマスに亀之丞を入れて、まず今の浜松市引佐地区の東光院へ、そこにも小野の追手が迫って来たので、南溪和尚と関係のある干柿で有名な市田の松源寺に匿ってもらった。井伊家が彦根に移ってから今村家は井伊家に仕え、さらに藩主の正月の給仕は歴代今村家の者がすることになっていたとのことである。これは東光院での隠遁生活で何もないときに正月を迎えたので、藤七郎が温かいお吸い物で亀之丞と祝ったことから来ている。

返り討ちあって死亡。直親、新野左馬助、他の重臣達も家老政次への非難はなかったのは不思議である。直親の結婚6年後つまり永禄4年(1561)2月期待の嫡子虎松が誕生するが、幸せなことは続かず、故小野政直の息子家老の小野但馬守政次に直親が松平徳川(方)に近づいた疑いで今川へ密告され、新野左馬助が積明に出向くも、直親本人の出頭が要求され永禄5年(1562)駿府へ行く途中掛川にて誅殺された。虎松にも誅殺の指示が出され、新野左馬助の指示により、虎松の祖父にあたる奥山朝利の孫六座衛門が虎松を三河の北にある鳳来寺に保護した。

直親誅殺一年後つまり永禄6年(1563)長老直平も今川の三河への出陣命令により、休憩した途中の引馬城(元々直平の城で城主飯尾連龍(つらたつ)は直平の家老でもあったと言いう文献有安心したのか)にて毒殺されたと言う。その後、松平と通じている疑いを持たれた引馬城主飯尾連龍は今川に対し謀反を起こし、激怒した今川氏真は井伊の中野直由と新野左馬助に引馬攻めを命じた。井伊としても直平を殺された恨みもあって、軍勢を送り込んだが、引馬の抵抗に総崩れとなり、永禄7年(1564)9月中野、新野とも壮絶な討死を

亀之丞後の直親は天文24年(1555)小野政直が亡くなったこともあって、隠棲先から11年後戻って来た。しかし許嫁の直虎はあまりにも待たされた故亀之丞が帰って来る一年前に出家し、次郎法師を名乗っていた。何故直虎が仏門に入ったかは、殆どの小説は政次の父親あるいは本人が直虎に政次との結婚を迫ったからと言うのが多いが、筆者もそう推察する。

今更 直虎は許嫁が戻って来たからと言って還俗するわけにはいかないと結婚を拒んだ。

直親は領主直盛の養子となり、やむなく奥山朝利の娘“しの”と結婚。

次項「桶狭間の戦い」で当主直盛の遺言を記すが、奥山朝利に不満もたらすことや、今更井伊の本拠は引馬城にあるべきなどは、いかに井伊家を弱体化するために、今川氏真か小野一派の意向が入っているように思う。

直親を除いて、重鎮で残っているのは中野直由、奥山朝利と長老井伊直平と新野佐馬助の四人である。

「桶狭間の戦い」の後半年後永禄3年(1560)12月直満の遺言に不満を持った奥山朝利は短気故小野政次が井伊家を牛耳っていると見て政次の屋敷を襲撃し

遂げた。

よく報道されるGW中に開催される浜松の風上げ大会は引馬城主飯尾連龍の長男義広の誕生を祝って義広の名前を記した大凧を揚げたのが起源と言われているが、歴史的にははっきりしないらしい。

ここに井伊家一門の男子は直親の遺児虎松しか残っていないなくなったのだが、その4年前の桶狭間の戦いを次項に記す。

三. 桶狭間の戦い

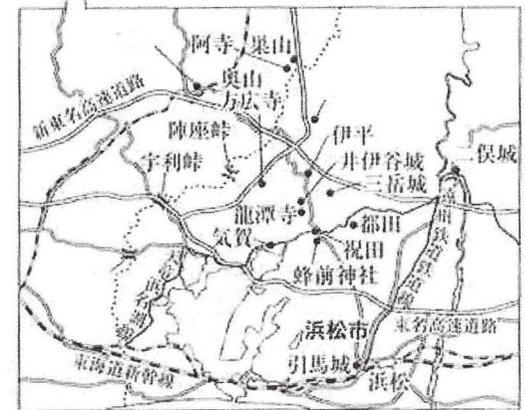
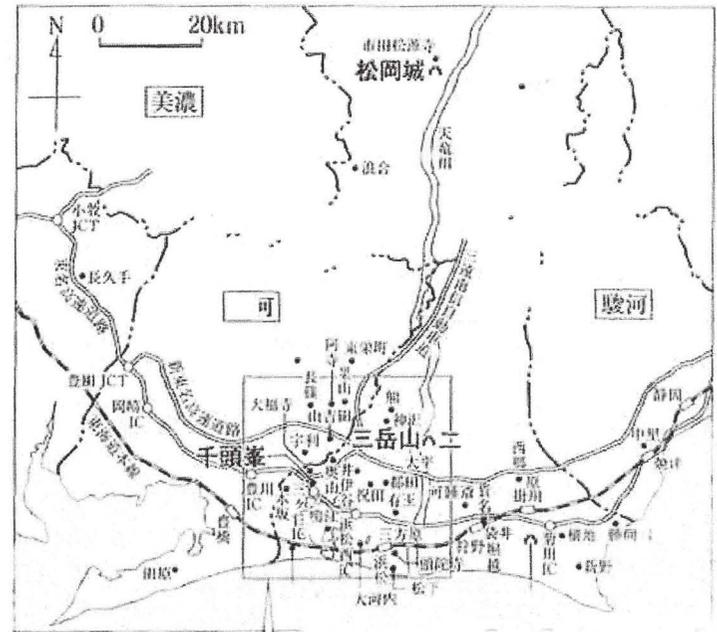
今川義元が永禄3年(1560)5月8日三河守に任ぜられ、三河支配の安定化を図るためだったが5万(実際は2万5千程度)と言われる程の大軍から上落して“天下をとる”まで行かずとも“今川の力を見せてやる”位の野望があったとも推測されている。直ちに駿河と遠江の国衆らに出陣の指示を出し、松平元康(徳川家康)と共に直虎の父井伊直盛も先陣を命ぜられ、万の事を考えてか、晴れて初陣と意気込んでいた跡継ぎの直親には家老但馬守政次と共に井伊谷を守らせることにした。5月11日直盛は率いる井伊家の軍団は颯爽と井伊谷を後にした。義元は元康に大高城に兵

糧を入れるよう指示した。

元康らによる丸根砦、鷲津砦の勝利に気を良くした義元は、大高に向かう途中の桶狭間で輿から降り、にわか雨が降ってきたこともあり、近くの寺で昼食をとることにした。そこへ2千人ほどの信長軍が攻めて来て、一方的に餌食にされた。井伊家からも2百名ほど従軍していたのだが、主だった義元本隊にいた井伊家当主直盛、小野政次の弟玄蕃など、武将16名を含めてほとんど命を落とした。ただ直盛は雑兵にかかったことを恥じ、奥山朝利の息子 奥山孫一郎に介錯を頼み遺体を持って帰らせ、切腹前に次の遺言を託けた。

一、中野直由を井伊谷城の留守居役にし、二、直親は小野政次の力が及ばないよう井伊谷から離し、家督を継ぐようになれば直平が井伊谷に、直親を直平がいた引馬に移って井伊の本拠地とする。井伊家の本拠を井伊谷の様な山ではなく、街道に近い引間にすべきと思うのは戦略的には時期尚早ではあったが、後の家康が引間城を浜松城として本拠としたので見る目はあったと思う。

義元健在の時迄は今川の監視体制は出来ていたのだが、義元が桶狭間の戦いで信長軍に敗れ、討ち死に



図：遠江周辺図

し、弔い合戦もしない嫡男 今川氏真に愛想を尽かした諸侯が勝手な動きをし始めた。

四・今川義元討死後の諸侯の動き

今川家の支配から一番最初に逃れようとしたのは松平元康(徳川家康)で、隣国の遠江に侵攻した。これに呼応したのは、新野左馬助、中野直由を戦死させた引馬城主であった飯尾連龍だが、今川氏真による攻撃に晒され、和解するものの、駿府に呼び出され暗殺される。このように、松平元康が独立し東三河へ侵攻を行うと、今川家臣であった三河の国衆(所謂三州錯乱)が引き起さされ、今川領が徐々に元康に奪われていくと、永禄5年(1564)の末頃から隣の遠江国でも動揺(所謂遠州念劇)が始まった。今川方も疑心暗鬼になり、直親や連龍を誅殺したと考える。

佐久城主浜名頼広はもつと隣れかも知れない。武田と徳川と争ったとき、飯尾氏と婚姻関係にあった故、一旦は徳川軍に属するものの、親族が徳川方の者により佐久城が包囲されると、武田軍に寝返った。徳川軍により

脱出し甲斐へと逃亡する。残された佐久城の城兵は徳川軍へ抗戦の構えを取ったことにより、徳川軍は領地安堵を約束し、佐久城は開城し、徳川勢に組み込まれていった。一方、領地も手勢も置き去り、逃亡した領主頼広は武田軍に受け入れられず、野に下り、近江でひっそり息を引きとったとのことである。

天竜川に近い二俣城は今川家 家臣であった松井宗信が城主で、徳川元康に攻込まれたとあっさり開城し徳川配下になった。この二俣城は家康の長男 信康が父家康の命により切腹した場所でもある。

井伊谷三人衆は密かに今川家を見限り、徳川家を遠江に案内したと言う。直虎もこの動きに賛同した模様。

今川家は遠江を井伊家に任せだが、その監視は堀江城(現館山寺温泉辺り)主 大沢基胤(もとたね)に委ねた。この大沢基胤は今川氏真から気賀地区にも城を造るよう命を受けたが、気賀のことは気賀でと言うことで直虎と親しい気賀の商人 瀬戸方久に金を出させ、海拔0mの堀川城を造らせた。大河ドラマでは架空の盗賊大将 龍雲丸がこの地を活かした城づくりをした為か、徳川軍が遠江に攻めて来たとき、前述したように他の領主は簡単に屈服したが、気賀の商人が参加し基

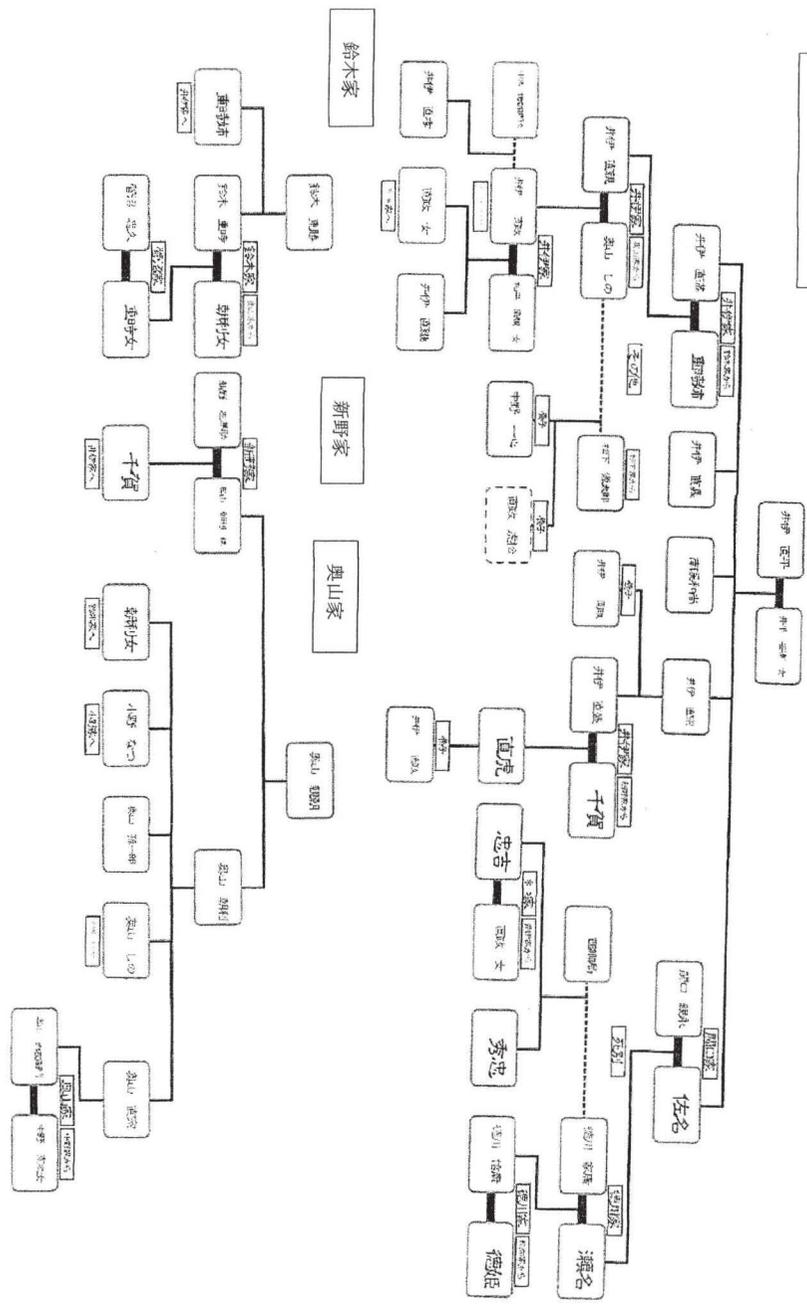
胤が 後押しした堀川城だけは持ち堪えた。これは満潮になれば水没し慣れた兵士が利を得たことと、大沢基胤が今まで今川家臣であった近藤など井伊谷三人衆が家康軍の案内役を引き受けたことに義憤を感じ徹底抗戦を命じたことにあると言う歴史家(夏目琢史氏)もいる。家康は大虐殺をしないとされているが、この時の家康は、大久保彦左衛門が書いた「三河物語」の中で「徳川勢による撫で斬り」と残している程、気賀の住民も含めて1700名にも及ぶので大虐殺を極めたと言える。

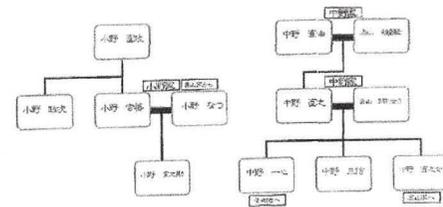
龍潭寺の南溪和尚、直虎の母 祐椿尼、直虎が供養したと言う。



写真：堀川城跡

図：井伊家 家系図





小野家 中野家 家系図

五、井伊次郎法師直虎誕生と徳政令

先に飯尾連龍は今川に対し謀反を起こし、激怒した今川氏真は井伊の中野直由と新野左馬助に引馬攻めを命じ、この戦いにより永禄7年(1564)9月 中野、新野とも壮絶な討死を遂げた」と説明したが、これ以降井伊谷には領主も領主代行する人間もいなくなった。直虎は表向き 政務はせず 祐椿尼と共に、死後も龍潭寺の松岳院に居た。多分家老の小野政次が政務を行っていたのだろう。『井伊家伝記』には「皆々女中ばかりなり但馬 諸事取り計らい、我儘ばかり致し、何とぞ井伊谷を押領仕えるべき旨相巧み申し候」などと家老としてやむを得ないと思うのだが、但馬政次を悪者にしてている。この他には「中野信濃守 井伊谷を預り仕置きなされ候あとに、討死の後は地頭もなく候。これにより、直盛公後室(祐椿尼)と南溪和尚相談にて次郎法師を地頭と定め、直政公の後見をなされ(後略)」とある。実際に 永禄8(1565)年9月15日付けで 龍潭寺南溪和尚宛に不動産などの寄進状が 次郎法師名で発行され 龍潭寺に保管されている。明らかにこの時 領主として直虎が活躍していた資料である。

実は 5年前の桶狭間の戦いの後、義元が死んで家督を継いだ今川氏真は2ヶ月後、義元に従って桶狭間で討死した井伊直盛の菩提所として永禄8年(1565)8月 龍潭寺に対し、特別に治外法権つまり「無援所」を認める判物(はんもつ・領主などが出す安堵、特権などを付与する文書)を出している。その代り徳政免除の特権を剥奪すると言うものだった。この男 蹴鞠だけやっているとかわれがちだが狡猾な駆け引きが出来る人物である。直虎は氏真の目論見を察して 誰もいなくなつたので領主代行程度のことではしななければならぬと、先の龍潭寺への寄進状を出したのだ。しかし 氏真の狙いは井伊領に徳政令を出させることだった。

徳政令はご承知のように不動産や質入れの契約を破棄させ、無償で返還させることである。何故今川はこれを望んだか 百姓、武士階級は当然 望むが商人たちは困るわけで、領内が混乱し 統地能力がないとみて皆が今川家を頼るからである。一揆などの騒動が起こると困るから他の国衆は徳政令を受け入れるのである。氏真も家老の小野但馬守政次も女領主を甘く見ていたのだろう、直虎の領主就任を素直に認めただけ

る。直虎は簡単に操れる女ではなかったのだ。直虎は必死になって「我慢してくれ」「田畑を戦場にしてはならぬ。我慢してくれ」「この地を血で汚してはなりません」と領民を説得し回つたのだ。逆に何故直虎は徳政令を出し渋るのか。それは気賀自体が商人の街で 商人と瀬戸方久などの権益も守り、かつ時間稼ぎだったのだろう。

いや、方久はもつと抜け目なく、今川氏真および大沢基胤と直接交渉し堀川城を建てるとき借財分を建築費として供出し、城主として収まり、しかも方久がつ土地などの徳政免除まで勝ち取っているのである。永禄9年(1566)出された徳政令を2年間凍結しつ

いに永禄11年(1568)11月9日付けで今川氏真の命令で今川の奉行である関口氏経と連名で次郎直虎の名と花押が見られる文書が峰前神社に保管されている。現代文で要約すると「徳政の事、去る寅年(永禄9年)御判物でご命令されたけれども、債権者が物事を進めず、今も決着していないため、本百姓が実現を求めて来たので、以前の御判物の内容通りに徳政を言い付ける。」これが唯一「直虎」の名が残され確認できる史料である。この文書が出来上がる迄に今川藩士の徳政訴訟

の担当である匂坂直興(さぎさかなおおき)が家老の但馬守政次および関口氏経と相談した内容を峰前神社禰宜宛の書簡が4通、峰前神社に保管されていると言う。この直興の手紙を良く見ると関口氏経にも礼(5貫文・現500万円相当)をしなければいけないとか、交渉するために駿府に長滞在するから経費がかさむ、その上に礼などの費用は村で負担せよ、とも書かれている。その他に、小野政次から十分直虎の承諾を取るようにと指示を受けた、直虎も承知済みの事だと、裏工作を細かく記載し、自分がいかに苦労しているか披露している。

関口は直虎も十分承知した氏真の下知を持つて乗り込んできたのである。遠江守護の名を以て、徳政実施を命ずる。手向かえば反乱とみなされ、武力でもつて鎮圧される。直虎にはもはや屈服しかなかった。

これにより今川氏真は直虎より地頭職を取り上げ、井伊谷を直轄地として、小野但馬守を城代に据える。直虎が地頭職にあったのは僅か4年。城を追われた彼女は母が居住する龍潭寺の松岳院に引き移るしかなかった。

しかし、小野但馬守政次による井伊横領、城乗つ取

六、井伊家再興

井伊谷を経て引間に入った徳川家康は、翌永祿12年(1669)明けから、早速今川氏真が逃げ込んでいる掛川城を攻め、その間に、家臣たちが、佐久城、堀江城と少し時間がかかった堀川城も次々攻め落としていき、その快進撃に、今川被官の遠江と駿河の武士たちは恭順。5月にはついに掛川城も開城させ、遠江平定はほぼ完了した。

元龜元年(1604)井伊谷に近い引間城を、家康が浜松城と改名し本拠とする。元龜3年(1606)井伊一族は遠江に侵攻してきた武田軍と仏坂の戦いなどで井伊谷城を武田軍に明け渡し、龍潭寺焼失するが、翌年、天正元年(1573)武田軍が井伊谷を焼き払うが信玄の死亡により井伊谷城を奪還した。

直虎と直虎の母(祐椿尼)に気になっていることがある。直親の後室(しの)がいっまでも独り身でまらずいと言うことで、南溪和尚のところに情報を持って来ていた松平の配下でもあった山伏の松下常慶と相談すると常慶の兄源太郎清景(後源太郎)も独り身だから

り、今川の力づくの介入は1ヶ月も持たなかった。今川の命運はすでに尽きかけていた。義元に貰った元康の名を捨てた徳川家康が、信玄と「今川領同時侵攻」を密約し、遠江侵攻の機をねらっていたのである。永祿11年(1568)12月13日前に既述したように井伊谷三人衆は家康を井伊谷に招き入れ、彼らの中の山吉田城主鈴木重時は直親の母親の兄にあたる。喜んで井伊谷への手引きすることになった。小野但馬守は逃走、行方をくらました。直虎は三人衆に領民や田畑に危害を加えないことを約束させ、但馬に従っている武士たちにも、抵抗してはならないと諭して、速やかに開城させたのである。地元の伝承や龍潭寺の過去帳は死者が出た記録はないから、皆直虎の説得を聞き入れたのだ。

2日後15日、徳川の軍勢は悠々と井伊谷城に入り、1日兵を休めた後、引間城へ向かい、制圧した。

勿論その前に、小野政次を洞窟にかくれているところを発見され元龜元年(1604)、二人の子供と共に井伊谷の蟹淵(井伊谷川R257線北岡橋付近)で家康により処刑された。あまりにも残酷であったのか、悪霊が出るとかで処刑約50年後、二宮神社内に但馬明神を建てて霊を祀ったとのことである。

と話ほとんど進んだのではないか。筆者が昨年の20号で、虎松も同時に松下家に養子に行つたと記載したが、そう言う記載もあるが、時期的に1年はずれている。歴史書には同時に松下に行つたと記載していない。お詫びして、訂正する。

もう一つ筆者の想像であるが、直親が誅殺されそうになったとき新野左馬助の指示により、虎松を救った今村藤七郎を覚えておられるだろうか。彼もまた新野左馬助もつまり妹である直虎の母、祐椿尼も松下家と同郷の頭陀寺出身である。この関係を記載している歴史小説はない。わずかに直親が殺害されたとき、まず新野家で虎松を匿ったとあるだけだ。常慶が家康に仕えていたこともあって、虎松の将来のこと考えてしのの松下清景との再嫁を進めた。天正2年(1574)龍潭寺で直親の13回忌に虎松も参加するが避難していた鳳来寺に戻らず、しばらくして、母の再嫁先の松下源太郎の養子となる。

もう一つ有名な話がある、なんと後秀吉となった木下藤吉郎を初めに雇ったのがこの松下本家(之綱)で、「さる」「さる」と呼ばれていたらしい。秀吉となつて之綱を大名に取り立てたのである。直政と会つた

とき秀吉はこのことを知っていたのだろうか。

話は虎松に戻って、翌年つまり天正3年(1575)家康が鷹狩途中に15歳に成長した虎松と会い、直親の子供であることから出仕するよう指示し、松下から改名し井伊万千代の名前も授ける。虎松の小姓であった小野亥之助(小野政次の弟玄蕃の息子)も万福の名前を授かる。この日の為に小袖を直虎らが準備したと言う。鷹狩り時のいきさつは昨年(1574)の20号に詳しく書かれている。松下家の養子となった虎松の代わりに家老役の中野直之の次男が松下一定と改名し養子になった。直之も直之の嫡男(三孝(三信)も松下一定も彦根に移ってからであるが、井伊家の家老となっている。

天正4年(1576)高天神の戦いで万千代が家康の寝所を忍び込んできた患者を斬り、家康を守った軍功で3000石となり、井伊谷が完全に井伊領に回復。ただこの時代の石高は出世ぶりを示す相対的な目安としてみたい。天正6年(1578)万千代が甲冑着初式をあげ、田中城攻めの武功により1万3千石となる。祐椿(直虎の母)が松岳院の庵で死亡している。

天正7年(1579)家康が信長との同盟維持の為に筑

山殿を殺害、嫡子信康を切腹させると言う事件が発生した。家康の嫡男(信康が信長の娘で信康に嫁いでいた徳姫を蔑(ないがしろ)にしたとか、徳姫が父親に夫に対する不平不満のつげ口による家庭内不和と政治的事情が絡まって起きたことだった。筑山殿の両親(関口親永夫婦も氏真に切腹を命じられる悲劇が連鎖している。家康の命令で万千代も岡崎の信康を訪ね、信康の優しさ、聡明さを知っているからこそ、悲しんだであろう。家康にとっては頼りにしていた嫡男であったのに：。万千代をさらに頼りにし、万千代に信康の面影を見たいのだろうか。

万千代は天正9年(1583)春、一年前から攻めあぐんでいた高天神城の水を断つことで陥落させたのである。天正10年(1584)6月武田滅亡を祝って、信長に安土で饗応を受けてから京見物をする家康に万千代は同行するが、本能寺の変に遭い、明知勢と土民の残党狩りを避け、死に物狂いで、危険な伊賀越えを決行し伊勢の山中を縫って白子の港から三河に戻る際、万千代は見事な活躍をしたとして、褒美に孔雀の羽で織った陣羽織を授かった。実際に、同行して途中で別れた武田軍

に愛想を尽かした武田の軍師であった穴山梅雪は残党狩りに殺害されたと言う。具体的にどのような万千代の活躍があったか不明であるが、この陣羽織は現在も新潟県長岡市の与板歴史資料館に保管されている。

万千代がその年の8月、甲斐国で北条と対陣中、直虎が死去。万千代の活躍及び出世ぶりは直虎の想像、期待以上で誠に満足して亡くなったであろう。しかし直虎は直政の叔母であり、養母であった故か彼女の享年はいかなる史料にも記載されていないと言う。11月万千代22歳で元服し、24代井伊兵部少輔直政と名乗る。残念なことに、直虎は直政の元服姿を見ずに亡くなったのである。しかし北条軍との講和の使者を務めて4万石に増えられ、武田氏の遺臣と赤備えを任せられる。

翌年天正11年(1585)直政が松平康親の娘(家康の養女)と結婚。直政を義理とはいえ娘婿にしたのである。後年の事であるが直政と正室の長女を家康は四男・忠吉の正室とした。今度は直政を息子の岳父としたのだ。いかに家康は直政を自分の血族に取り込もうと試みていたかである。

またその翌年天正12年(1586)小牧・長久手の戦いで直政の赤備えが活躍し、「井伊の赤鬼」の称号を得る。天正13年(1587)8月、信濃上田城の真田攻めの参戦中、生母しの(奥山朝利の娘)死亡。前年の小牧・長久手の武功で6万石となり井伊家旧領のすべてを回復した。

その年の5月秀吉の妹旭姫(家康に嫁ぐ。それでも家康は上洛しなかったため、秀吉の母大政所を岡崎城へ旭姫の見舞いを名目に行かせた。ここまでされたら拒めない)で上洛し、臣下の礼を取る。その前に大政所の警護役を任せられた直政は朝な夕なに宿所を見舞って菓子などを差し入れ不自由ないか尋ねて慰めたから大政所やその侍女たちはすっかり惚れ込み、人気者になったと言う。その以前は本多重次らにより、大政所の居所の周りに薪を積み上げて家康の身に何かあれば、いつでも火をつけるぞと彼女たちを恐怖のどん底に陥れたのとは大違いだった。これは幼いころ、養祖母(直虎の母 祐椿尼)、養母(直虎、実母)のなど大勢の女性に囲まれ、その愛情を一身に受けて育ったから、各世代の女性が何喜ぶか、嫌がるかを察することが出来る、思いやりと労わる気持がおのずとあったのだろう。

以来、秀吉にも目を掛けられ、天正16年(1588)に秀吉が後陽成天皇を招いた聚楽第行幸の際には、陪審ながら徳川家中でただ一人、豊臣方の大名達と同格に臨席した。破格の厚遇である。

天正18年(1590)、小田原攻めを果たした後、家康は秀吉から関東移封を命じられて入国。それに伴って直政は上野箕輪(群馬県高崎市)で12万石を与えられたが、それは実は秀吉の上意だった。

ひよつとすると秀吉は家康の側近であった石川数正を引抜いた様に直政も引抜いて自分の直臣にせんと目論んでいたかも知れない。だが、直政の家康に対する忠誠心は群を抜いていたのだ。家康の方も、直政の寡黙ながらも的確な判断力を高く評価していたに違いない慶長3年(1598)直政が箕輪城より交通の便が良い高崎城に移る。秀吉死亡。

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで、先鋒の軍監を務め、娘婿の松平忠吉に初陣の手柄を立てさせんと先手を切つてのけた。獅子奮迅の働きを見せつけ、西軍の殿(しんがり)・島津軍を追撃して島津豊久を打取っ

たが、島津軍の必死戦法「捨て奸(すてがまり)」の襲撃を受け右肘に被弾してしまった。家康は自ら薬を塗ってやつたと言う。軍功で自分が攻略した石田三成の居城・近江佐和山城の城主(18万石)となった。

しかし、直政は2年後、つまり慶長7年(1602)関ヶ原での傷がもとで病死してしまい、徳川の外交は本多正信らが主導する老練だが、あまり洗練されないものになったと言われた。

直政の嫡男 直継は佐和山城を改築すべく行動し始めたが、佐和山城は石田三成の父親が籠城して戦ったためか、相当荒れていたことと、南からの攻めに弱く琵琶湖からも遠いと言うこともあり彦根山に幕府の意向もあつて、天下普請で7ヶ国12大名が手伝って築城することになった。慶長11年(1606)天守閣が完成すると直継は入城した。慶長15年(1610)筆頭家老の木俣守勝が無くなると、直継は病弱でもあつたので、異母弟の直孝が後を継いだ。

直政が何故このような破格の出世をしたか 順番は識者によりそれぞれ異なるようだが、筆者は①一時と

は言え 秀吉が自分の妻の旭姫を見舞いに来た大政所への直政の親切な扱いに対しての秀吉からの家康に対する厚遇要求が大きいと思う ②文武に長けていたこと。特に家康配下の三河出身者になじ交渉力、文章力があつた ③家康が自分の松平よりも井伊の出自を買つたこと ④家康が自分の正室であつた井伊家出身の筑山殿を信長の命により殺害したことへの負い目を感じていたこと ⑤桶狭間の戦いの折 家康自身が元康時代直政の養母直虎の実父である直盛と共に先鋒の役を買つて出たが、元康は今川義元から先に大高城の食糧補強を命じられ、本陣を離れ、直盛も大高城への同行を希望したが、義元の許可が出ず、その間に本陣が崩れ 義元とともに直盛が戦死した。その誓い合った戦友の孫ともいえる直政を大事にしなければならぬと家康が感じたのだろう ⑥直政の実父 直親が徳川方と通じていたことを家老職の小野政次に見つかり諫言され 今川方にて誅殺されたことに家康が責任を感じたこと。

その後、2代将軍・秀忠、3代将軍・家光に信任され直孝の功績で3度にわたり、格式35万石にまで加増さ

れた。直孝は直政以上の行動力があり、父親が得た石高をほぼ倍にしている。やはり同じ譜代で彦根藩の35万石に次ぐのは姫路の酒井家、越後高田の榊原家の15万石であり、徳川300年を通じて一度も移封されなかつたと言うことでも、また徳川幕府300年の歴史中、10人しかいない大老職を半分の5人も搬出すると言う特別な存在でもあつたのだ。直虎が夢見た井伊家再建を期待以上に成し遂げたのである。

意外なことは、戦国時代を生き抜いた割には今川の命令で動いたことはあるが、自らが侵略すると言うことはなかった。井伊家は平和な一族と言えるだろう。それともう一つ、①直政以降 彦根で活躍しているのは、井伊谷出身者は少なく、武田軍出身者が多いことと②家老役小野但馬守政次を磔にしたがら、その弟の玄蕃の嫡男 亥之助(元服後 朝之)は直政の小姓として仕え 井伊与板藩の家老にもなっている。家康として考えられないことであるが、逆賊の甥であつても直政を支えてくれた万福(家康が与えた名前)をも、大事にしたのだろうか、などなど、もっと調べるべき課題は多い。

完